君が歩くから

るう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が歩くから

【コード】

N0086H

【作者名】

るじ

【あらすじ】

あきらは登校途中で聞こえるピアノの音がいつも気になって…

ブローグ〜piano〜

ピアノの音が大きくなり、小さくなり。それはさざ波のように、時に嵐のように。

(きれいだ)

あきららはピアノなんて聴く趣味はなかったけれど、その音は充分感動できるものだった。

ゲイジユツというのはいつものなんだろう。なんとなく、そう考えて笑ってしまう。

ゲイジユツ、なんてそんな言葉とも縁がなかったのに。

第1話：chikoku

「あーきーらー！ また遅刻だぞ！！！！」

「おつ。待つてろ」

サクライ 佐倉井あきら。高校一年。早生まれの16歳。

クラスメイトシマダコウセイ 遅刻回数トップのあきらに、級友の嶋田光世が手を振る。

北海道の春は短く、桜はとうに散ってしまったもうなんの枝かわからなくなってしまった枯れた枝の隙間から、嶋田が破顔してるのが見える。

「佐倉井！ ほら急げ！ もう鳴るぞ！」

生活指導の立原にも怒鳴られた。

(うーん。人気者だなあ。オレ)

などと他人から見たら勘違い男、と言われかねない事を考えながら悠然と歩を進める。

低血圧だから遅刻は仕方ないんだ、と常日頃から主張しているが、遅刻の理由にならないと同じく低血圧リダの英語の教師から口を酸っぱくして言われている。もっとも、低血圧だから仕方がない、というのはうわべだけの理由で、本当は「どうして遅刻しちやいけないのかわからないから」だった。

遅刻というのは、礼儀に欠ける行為。だから駄目なのだろう、となんとなく想像してはいるが、「学校」というものを相手にどうしてそこまで礼儀を払わないといけないのかがあきらにはわからない。もしもこれが、大事な友人などだったら話は別で、あきらは決して遅刻などしないが、学校に遅刻してはいけない、という理由がどうしても思いつかないのだ。

屁理屈だとわかつている。

けれどあきらはその考えの呪縛から逃れられないでいる。

もしもこの問いに納得のいく答えをくれる人間がいたなら、遅刻する自分を恥じたかもしれない。

しかしまわりにいる学友、教師たちはそんな事まで考えていないような素振り、馬鹿の一つ覚えのように「遅刻はしてはいけないものなんだ」と繰り返す。それが更にあきらの気分を害するのだ。

(ばかばかしい)

チャイムが鳴り、ぱらぱらと急ぎ足になる他の生徒を横目に、あきらはもう覚えてしまったピアノのメロディーを口の中で呟きながら、まだまだ足を速める気もなく歩き続ける。

もっとも、こんなくだらない事にしか気がいかない自分の単調な生活に飽き飽きしての、ただの現実から逃れるための悪あがきなのかもしれないが。とちよつと自嘲気味に考えてみたりもする。

こんな事を真面目に考える自分は、実は誰よりも真面目な生徒なのではないだろうか、などと考える自分もいて、笑いたいような不思議な気分になる。

第2話：n a m a e

遅刻をした生徒は正門からは入れない。裏門から入り、その都度、生活指導部で保管している俗名「遅刻ノート」に名前を記載する決まりだ。

佐倉井あきら、と走り書きで記入し、なんとなく、ぱらぱらとノートをめくる。当然自分の名前がダントツに多かったが、その中でひとつだけ目をひく名前があった。

『小林未来^{ミナ}』

少し弱い筆圧で、けれど綺麗に並べられたその文字を見て、ドキリとする。始業式の次の日の日付だった。そして、その後にはその名前は書かれていなかったが、これは遅刻をしなかったからではない。

「佐倉井、何してる。さっさと教室に行きなさい」
不意に後ろから声をかけられ、あきは慌ててノートを閉じて教室へ向かう。

ドアで遮蔽された声が、ドアをあけると共に鼓膜に押し寄せてくる。教室に入ると、嶋田がにやにやした笑いを向けてきた。

「おまえ、もうこれで遅刻何回目だ？」

「知らね。それよりさ、もしかしたら今日オレ^{グラマー}英語当たるんじゃないかね？ 何番目だっけか？」

「それこそ知らね。言っとくけど、見せてやんねえからな？」

「いいよ別に。コウスケの回答なんてアテになんねえし」
軽口を叩きながら、席につく。

あきは嶋田の事をコウスケと呼ぶ。光世なんてガラじゃない、というのが理由だ。なんとなく偉そうではないか。

「言ったな？ 悪いが今日はそんな昔のオレじゃないぞ。姉貴にやつてもらったからな。全問正解だ」

「ほお。しかしよくやつてもらえたな。あの守銭奴に。いくら払っ

「たんだ？」

「1000円だ。おかげでオレは今日の昼飯は抜きだ」

「……相変わらずの守銭奴っぷりだな。コウスケのねーちゃん」
言いながら、ノートと教科書を出す。

嶋田には4つ年の離れた姉がいて、かの有名なT大学に入れるほどの成績の持ち主だった。

しかも同じ高校だったので、嶋田はいつも姉と比べられている。どうして、決して成績も良くない嶋田と同じ高校なのかというと、「桜が綺麗だからだ」ということらしい。変な所で乙女心を見せてくる。性格も特殊で、お金をもらわないと他人のためには指一本たりとも動かさないというポリシーの持ち主なのだ。決して豪遊しているわけではないのだから、彼女の貯金額はいつたいいくらになっているんだろう、とあきらは常日頃から思っている。それを抜かせば、姉御気質でなかなか楽しい姉だ。

さて。
グラマーは一時間目だ。

第3話：yume

音が：時に波のように、時に嵐のように。

（きれいだ）

いつも、同じ感想しか抱けない自分が嫌になる。

通学路の途中で聞こえる音楽。不思議と、帰り道には聞こえない。しかもいつも同じ曲。

（他の曲は弾かないのかな…）

他の曲も聴いてみたい、と思わせた。

なぜだろう。

その音楽が聞こえるだけで、ただの車の音が、まるでドラマの一部を切り取ったように聞こえてくる。自分の一挙一動までが、ドラマに組み込まれたかのような感じだ。たまに音を間違える時があって、その瞬間だけ、現実に舞い戻ってくる。

誰が弾いてるんだろう。何歳なんだろう。男なんだろうか。女なんだろうか。

「…くらい…」

「え…？」

「さくらい」

ピアノの音と一緒に、なぜか自分の名字が空気を渡ってくる。

「佐倉井」

後ろからだ。

あきらは立ち止まり、踵を返す。

…と、

「佐倉井！」

唐突に、頭に硬いものがぶつかってきた。

「いてっ」

「起きろ！」

英語の立原のアップが目飛び込んできた。

(夢だったのか…)

というか、寝ていたのだ。

「おまえは、遅刻しておいてまだ寝足りないのか？ 保健室で寝てくるか？」

「いや、遠慮しときます。すみません…」

保健室のおばさんは、一発で仮病を見破る事ができるという不思議な技を持っているのだ。そして見つかったあかつきには、すぐに担任に連絡がいつて説教と宿題を食らう。

(あんなのもうごめんだ…)

あきらは宿題を嫌う、ごく平均的な生徒なのだ。

「ったく。明日は当てるからしつかりやってこいよ？ それにほら、そこに鞆を置くな、と何度言ったらわかるんだ？ 下ろしなさい」
言われて、隣の席に置いてある鞆をしぶしぶ下ろした。

(いいじゃねえか。どうせ来ないんだから)

隣の席は、登校拒否を繰り返す女子生徒の席だった。

小林未来。

新学期に一度だけ顔を合わせたつきり、彼女は一度も登校してきてない。あきらは顔も覚えていない。新学期に顔を合わせたはずだったが、まさかその時には登校拒否になるとは思わなかったのだ、大して気に留めてなかったのだ。

極端に成績が良く、入試でトップだったという衝撃的な事実を知ったのは、それから数日経ってからだった。ちなみに二番手はあきらだった。遅刻魔の正体は実は成績優良児だったのだ。

けけけ、と嶋田が笑っていた。

窓から差し込む光がペンケースで反射していたので、眩しくてペンケースの位置を変えた。窓の形に切り取られた、嫌味なまでに蒼い空は、北海道に遅い夏が近づいていることを告げていた。

第4話：manbiki

「な？ 悪かった。オレが悪かった。謝るから」

「知るか」

舞台は変わって昼休みである。

教室中を舞う、さまざまな食べ物の匂い。ドアの向こうもこっち側も、昼休み独特の開放感に満ちたざわめきがあふれている。そして倉田の胃袋も、負けじと盛大な音で自己主張をしているようだった。

「人を唾う人間に与えるメシはねえ」

「だから悪かったって言うてるだろ？ っていうかちょっとエガオになっただけじゃねえかよ」

「エガオってガラかよ…」

「なあなあ。ほんとにマジで腹減ってるんだって」

あまりにもしつこいので、あきらまはふい、っと横を向いて昼食を続ける。賢明なのは、適当に数百円与えておとなしくさせて優雅な昼食時間を送ることだが、それにしても腹が立ちすぎている。

立原に叩かれた時 といっても最近はいろいろとうるさいので、軽く小突かれた程度だが あの嶋田の顔。気分爽快、ざまーみる、と言わんばかりのあの顔が非常に気に障るのだ。

もつとも、そもそも居眠りをしていて自分が悪いのでほとんど逆恨みだが、その事については考えないようにした。

午後も1時を回って、外から照りつける日差しは更に強さを増しているようだった。ペンケースの置いてあった場所は、すっかり熱くなっている。開け放した窓からは、グラウンドの湿った匂いが流れてきていた。

嶋田はちよっと焦ったようにしばらく目を左右に動かしていたが、「あ、そうだ」と何か思いついたように軽く机を拳で叩き、そして少しもったいつけるように言った。

「じゃあいいこと教えてやるよ。小林ってさ、万引きの常習犯なんだって」

「へ？ 何を急に」

「いや、夏休みのプリント、小林に届けるように言われてたろ？」

小林プチ情報だよ」

なんだか嶋田の目がマジである。お腹が極限にすいてるせいなのか、それともその「小林プチ情報」とやらがそんなにすごい情報なのか。どちらにしろ、

(ちよつといじめすぎたかな…)

そんな事を考えてるあきらをよそに、嶋田は得意げに話を続ける。

「中学生に小林と一緒にのクラスだった人から聞いたんだけどさ…」

どうやら、中学生の時も不登校気味だったらしい彼女だが、よく生徒指導室に呼び出されている姿を見た人がいるらしいのだ。その時に、万引きという言葉聞いた人がいるというのが嶋田の話だ。

「警察で働いている父さんに、『小林未来って知ってるか？』って聞かれた人もいるみたいだぜ。気をつけるよ」

なんだか茶化すようにして短い小林プチ情報を終わらせる。

「気をつけるよ、たつって、別に暴れるわけじゃないんだろ？ 万引きしただけなんだからオレが気をつけるも何もないじゃん」

言いながら、遅刻ノートに残っていた筆跡を思い出す。それはとても弱々しくて、『万引き』という言葉からはあまりにもかけ離れている気がした。

「んなこと言わねえで気をつけるって。んで、オレに食いモン恵んで」

「それが言いたかっただけじゃねえの？」

「気にすんなよ」

たつぷりと肺から空気を出し切るようなため息をつき、あきらは財布を取り出した。小林プチ情報に感激したからではない。放っておいたら、今度は学園七不思議とかを話だすような気がしたのだ。これ以上くだらない話は聞きたくない。嶋田は無意味に情報通な少

年なのだ。

「おつ。よつ。あきちゃん。太つ腹！」

「あきちゃん言うな。貸さねえぞ」

「嘘！ ごめんなさいあきら様！」

大きく舌打ちして、500円玉を嶋田の方に滑らせた。

「貸すだけだからな。ぜつてえ返せよ」

「返すつて。さんきゅさんきゅ」

言いながらも、すでにお尻は椅子から上がっている。そして、でもさ、と空中に浮かぶ一点を見つめるような目をして付け加えた。

「成績良くてピアノ上手いの、なんで万引きなんかするんだろ」

(え?)

ざわり、と毛が逆立つような気がした。頭に思い浮かぶのは、いつもの朝の光景。

(まさか...)

「ピアノつて？」

「うん。たまに音楽室で弾いてるのを聞いた事があるつてヤツがいるみたいんだけどさ、上手いつて言つてた。つていうかさつさと購買いかないとパンが〜！！！！」

「めばしいパンはもうないんじゃないの？」

「なんだと！！」

言つて、嶋田は全速力で駆けていった。

後ろ姿が見えなくなるかならないかの間に、鞆から住所録を取り出した。あとで確認すればいいや、と思つて彼女の自宅はまだチエツクしてなかったのだ。

ずらりと生徒の名前が並んでいる表の上から指でなぞる。心臓がドクドクというのに合わせて、指が微かに上下に揺れる。

(焦るなよ、オレ)

小林未来という名前を見つけて、目を横に滑らせ、書いてある住所と記憶の中の風景とを比べる。普段住所などあまり意識したことになかったので、時間だけがかってやきもきする。

「…マジかよ」

思わず言葉に出す。いよいよ心臓は盛大に高鳴っていた。どう考えてもピツタリとその住所と場所が符号する。何度も何度も数字を確認する。間違いない。

たっぷり数分間ほど経つと、数字の確認に飽きて窓の外を見つめる。一秒間に数ミリの単位でゆっくりと流れる小さな雲。その風景にいつもの通学路が重なって、消える。そして次に浮かんだのは、架空の玄関先だった。こぢんまりした玄関先に、パタパタと近づく足音。

(顔、見えるかな…)

現金にも、あきらの頭からは『万引き』の文字は消え去っていた。話は短かったが、500円には余る情報だった。

第5話：p a z z l e

(ほんとにココだ)

心臓がどきどきしすぎて、胸と喉元の両方で拍動している気がする。なぜか、頭にこびりついたはずの音楽は、今に限っては頭から抜けていた。かすかに車の音。風の音も聞こえるんじゃないかと思うほど、辺りは静かだった。関節がギシギシいつてる気がする。要は、本当にとっても緊張しているのだった。

なぜなら、今、チャイムを鳴らそうとしているその家は、いつもピアノの音が聞こえるまさにその家だったからだ。

(だからってこんなに緊張しなくてもいいと思うんだけど……)
生ぬるい風が吹き抜ける。

機械になったような気分で、えいや、っとチャイムを鳴らす。清水の舞台から飛び降りる、とはこのことを言うんじゃないだろうか、と思えるほどの勇気を持って。

「ピンポン」

こだまのように、チャイムの音が転がっていった。

「はい」

チャイムの音に呼応するように、高い声が聞こえた。高いことは高いが、なんとなく、期待していた声よりも低い気がした。

ドアが開いた向こうから覗くのは、恰幅のいい女性だった。食事の支度をしていたのか、美味しそうなお匂いがドアの向こうからむわつとでてきた。

「こつ。あのつ。オレ、小林さんにプリントを……」

「あら。こんにちは。未来にもってきてくれたのかしら？」

「はっ、はいっ」

まるで何かを懺悔させられているかのような気分だった。さしずめこの女性はマリア様だろうか？

「いらっしゃい」

ごく自然に招かれてしまつて驚いた。

(マジかよ…)

白目をむきたい気分で、軽く一礼してそつとフローリングの床の上上がった。靴もきちんと綺麗に揃える。

ガラス戸になつてるドアをくぐると、さらに美味しそうな匂いが濃密になった。料理のことはよくわからないが、煮物なんかを作っている時の匂いと同じように感じる。

落ち着いた色合いの部屋で、ソファがあつたのでなんとなくそつちへ近寄る。

まさか座る度胸もなく所在なげにしていると、すぐに未来の母親とおぼしき女性はコップを持ってきた。

「お水だけでごめんなさいね。今ね、おはぎ持つてくるから」

「おかまつ…い、な……」

おかまいなく、と言いたかつたが、普段言い慣れない言葉なのでうまく言うのに失敗した。

そのことをあまり気にした風でもなく、女性はタンタン、と小気味よい音を立てて去つていった。

こくりと唾を飲み込んで、その場に座つた。ソファに座るよりも、それが一番正しいような気がしたのだ。

透明な液体を一口飲むと、まわりをちよつと見渡す。3枚ほど絵があると思つたら、ジグソーパズルのようだった。しかも結構大きい。2000ピースほどあるのではないだろうか。

「掃除、あとでしょうと思つたのよ」

言い訳のように言いながら、女性がおはぎを持つてきた。こぶりのおはぎが綺麗に並べられていた。

ほんとに自分はここにいってもいいのだろうか、と今更ながらあきらは思った。

「ありがとうございます」

「未来、いればよかつたんだけど、今はちよつといないの」

「でかけてるんですか？」

立ち入ったことかもしれないと思いつつ、聞き返した。

「そうね。でかけてるわ」

女性はちよつと思議な言い回しをした。

「本当にごめんなさいね。せつかく来てくれたのに」

「いえ」

社交辞令じみた会話を交わしておはぎを食べた。あっさりとした素朴な味が美味しかった。手作りだろうか。ジグソーパズルは未来の趣味らしいことがわかった。あきらの家にも大きなジグソーパズルがあつて、なんとなく、そんな共通点が嬉しかった。嬉しいと思つて、まるで恋愛でもしてるみたいなの動きに、なんとなく照れた。

「あ、それじゃ。帰ります」

おはぎを食べてる間ずつと未来の母は向かいにいて、そのまま見てられるのも居心地が悪かったのであきらはすぐに腰を浮かせた。

「なんのおかまいもできなくてごめんなさいね。未来、帰ってこなかったわね」

「いえ、いいです。プリント届けに来ただけなので」

「そう」

元来た道に戻って靴を履いた。

じゃ、とドアノブに力をこめたら 勝手に開いた。

(うあつ、と)

長髪の女の子のアップがいきなり目に飛び込んできて、驚いた。

ストレートの髪の毛を無造作に下ろして、ゆったりした空色のワンピースを着た女の子が、くりくりの目をすごく大きくさせてこちらを見つめていた。

「あら。未来。こちらの人、わざわざ来てくださったのよ。お礼言いなさい」

未来はそれを聞いて、軽く息をのむと、ものすごい勢いで後ろを向いて一直線に走り出した。

「ま…っ！」

反射的に、あきらも走った。

「待った！ ちょ…っ！」

角を曲がる所で勢いを落とさないようにして走って、彼女の進行方向に割り込むようにして体を滑らせた。

まさかドラマみたいに手をつかむのも躊躇われたので、体で止める。最近運動らしい運動もせずにしたことを後悔する反面、意外に動きの速かった彼女にびっくりもした。不登校ってという言葉だけでもうちょっと動きの遅いイメージを作り上げていたのだ。

「あのさ、ピアノ、うまいね」

「えっ」

透明感のある声だった。まるで虚を突かれたように、またこぼれそうなほど大きな目をした。

「ほら、よく、聞こえるから。朝。誰が弾いてるんだろっ、っていつも思ってたんだ」

うつむいてしまった。

まるでこっちがいじめてるみたいで嫌だったので、慌ててフオロ―するように続けた。

「オレ、ピアノとかあんまり聞かないんだけどさ。でも、いいよね。なんか」

すてきだね、とは恥ずかしくて言えなくて、語尾を濁した。

この際、なんでもいいから何か言っただけ欲しい。

強烈に恥ずかしくなってきた。追いかけて。まるでほんとに、

(恋とかじゃないからな)

たぶん。まだ。

「じゃ、ね」

もっと話していたかったけど、何を話していたのかわからなかったから仕方なく一方的に打ち切って背中を向けた。

と、消えそうな声がした。

「…っして」

「なに？」

「…どうしてそんな風に…ピアノの話なんて…」

「どうしてって?」

「噂、流れてるんでしょう? 私の」

「あ…万引き…とか?」

またうつむいてしまった。悪いことを言ったのかな? でも、噂といえはそれくらいしか思いつかない。

言ってしまった言葉を、ちよつと軽率だったと後悔したが遅かった。

彼女は、今度こそ一目散に駆けていってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0086h/>

君が歩くから

2010年10月10日15時02分発行